マッセ・セミナー（河北ブロック職員研修協議会共催）

「住民協働によるまちづくり
～住まいの町から文化の町へ～」

開催日：平成23年３月１日（金）
会　場：交野市立保健福祉総合センター　４階　交流ホール

マッセ・セミナー（河北ブロック職員研修協議会共催）

「住民協働によるまちづくり ～住まいの町から文化の町へ～」

大阪市立大学大学院創造都市研究科　教授
佐々木　雅幸　氏

はじめに

今日は文化芸術で都市が元気になるということで、非常にお金のかかる文化芸術だけでなく、具体的な日常生活の中に文化を入れることによってどのように都市が変わるか、あるいは非常に汚い場所、ホームレスや失業者の多い場所でも、実は意外に芸術が役に立つという話をさせていただきます。

まず、大阪のメモリアルな施設を映した３枚の写真を持ってきました。真ん中にあるのは、今は跡形もなくだんだん崩れていますが、新世界にあるフェスティバルゲートです。これが造られたときはまだUSJができていなくて、昔は市電か市バスの車庫でしたが、大阪市交通局が地面を持っているので、土地信託という形で施設を造った、いわゆる都市型の遊園地です。海底のアドベンチャーをイメージしたもので、とても風変わりです。地下鉄の駅から上がってくると、ジェットコースターが大蛇のようにぐるぐるとビルに巻き付いていて、私も2003年に大阪市大に移ったときに最初に来て、とんでもなく変なものを造ったものだと思いましたが、案の定、倒産しました。

この施設は実は何回も倒産して、最後は結局、解体されてしまいましたが、１回目に倒産した後に、大阪市がいろいろな局に何かいい使い道はないかと声を掛けて、ゆとりとみどり振興局が若いアーティストに活動の場を与えてはどうかと企画しました。そして、四つのアートNPOがここに入って約５年間活動したことがあります。大阪市としては、これまでにないクリエイティブな、つまり倒産した遊園地を使って芸術で何ができるかということを実験したわけです。すぐ隣にある釜ヶ崎の方たちが来て、アーティストと一緒にいろいろなことをしたり、日本橋の商店街にも近いので、商店街で最近までしてこなかった盆踊りを復活するなど、いろいろなことをしました。

もう一枚の写真は、ガスタンクのように見えますが、実は下寺町にある應典

院というお寺です。ここは第二次大戦以降、廃墟になっていましたが、そのお寺を再建するときに、普通の葬式のためのお寺を造っても仕方がないと、住職が本堂を劇場にして、普段は若い人たちの演劇など、パフォーミングアーツに使えるようにしました。一応は宗教施設ですから税金が助かるということで、その分を若い人たちが安く使えるアートスペースに提供したわけです。このお寺は今でも元気にやっています。秋田住職はこの前、新潮新書から『葬式をしない寺』という本を出されていて、これは大阪らしい試みだろうと思っています。

もう一枚は、築港にある住友倉庫の赤レンガ倉庫です。日本各地にある赤レンガの建物はほとんど壊されていますが、創造都市のような事業をしているところ、例えば横浜などは赤レンガをきれいに整備して残していて、そこにレストランが入ったり、若い学生やアーティストが自由に使える空間になっています。大阪市も一時期、赤レンガ倉庫をアートスペースに使っていましたが、いろいろトラブルが生じて、最近はあまりうまくいっていないようです。

ここで何が言いたかったかというと、倒産した遊園地であれ、お寺であれ、使われなくなった倉庫であれ、そういう場所の方が若い芸術家にとっては面白い場所で、いろいろな可能性のあることができる、それを市民が一緒に楽しむことができるのだということです。

１．創造都市の先進地・バルセロナ

世界では今、新しい都市のイメージ、あるいはまちづくりの方向性として、クリエイティブシティという言葉が駆け巡っています。ガウディという天才が造ったサグラダファミリアという建物は、まだ現在も造り続けていて、完成までには恐らく100年、あるいは200年ぐらいかかるかもしれないと言われています。日本にある特に都心の高層ビルなどはあっという間にできてしまいますが、ヨーロッパでは一つの建物を数百年かけて造るのが当たり前なので、だんだんに町が変わっていくのでしょう。

このバルセロナという町は、私の目から見てとても創造的です。まず、現代を代表するピカソ、ダリ、ミロという大芸術家がここで生まれています。たまたま３人が同じような時期に活躍しただけでなく、町の中に非常に個性的な建物群があります。ガウディとガウディに連なる人たちの考え方が面白いのです。

特に市役所など公務員の皆さんが働く場所は、建物がまず直線で囲まれています。空間を合理的に使うためには、やはり直線で計算した方が分かりやすく、恐らく構造計算をしやすいのでしょう。しかし、ガウディは直線でできた建物を極端に嫌いました。彼は、都市の建物にも生命が宿るべきだと考えたからです。私たちの体も含めて、生きているものはみんな直線ではなく、曲線で囲まれています。命とは丸いもので、曲線なのです。だから、建物にも全部曲線を使っています。命が宿るような、命が躍動するような建物を造るということです。

この町へ行って一番驚くのは、町の目抜き通りです。大阪でいうと御堂筋ですが、今の御堂筋は６車線もあって、車が中心に流れています。ところが、バルセロナのランブラスという目抜き通りへ行きますと、車は両端の１車線ずつしか走れません。真ん中は歩行者天国です。それも日曜日だけでなく、年中そこを市民や観光客がゆるゆる歩いています。そして、５mおきぐらいに大道芸人が並んでいるのです。つまり、町の中心街は人間主体の空間なので、車がわが物顔で走るのはおかしいという考え方をとっています。今、ヨーロッパはどこでもそうで、都心部に車を乗り入れられるのは一番遅れた町です。大概、都心部から車を排除しています。そして、人々が歩いておしゃべりをしたり、ショッピングを楽しんだり、大道芸を楽しむという空間にどんどん変わってきています。その先端を行っているのがバルセロナなのです。

また、突然、公園の中に大きな猫のオブジェがあります。これはパブリックアートといって、公園や公共空間に芸術作品を展示しているのです。大阪でいうと西成のような、昼間から失業者の人たちがごろごろしているようなところに、突然こんなものを置いて、何となく町の雰囲気を変えてしまおうというわけです。小さな広場にさまざまなアートを置いて、あっと驚かすような効果を狙って町を再生していくということが起きています。

現在、バルセロナは世界的にも非常に大きなイベントを行っています。有名なところでは、1992年にバルセロナオリンピックを成功させました。スポーツの世界では、サッカーのスペインリーグで一番有名なのがバルセロナというチームです。マドリードという日本の東京に当たる都市には、レアル・マドリードというサッカーチームがあります。これは日本でいうと巨人に当たって、お金に物を言わせて世界中の有名選手を集めています。ワールドカップで活躍したジダンやロナウドなど、いろいろな人を集めてくるのですが、バルセロナに

は勝てないのです。バルセロナは強いときの阪神のような感じでしょうか。マドリードとバルセロナはちょうど東京と大阪のような感じで、バルセロナの方は、あまりお金はかけないのですが、ファンタジスタといって、とてもアイデアのある選手を集めてきます。いいときのロナウジーニョはすごく切れました。最近は日本人選手もイタリアやオランダで活躍していて、つい最近では長友選手がイタリアのインテルに行って活躍していますが、やはりファンタジックなプレイまではまだ出ません。そういう思いがけないアイデアのあるような選手が生まれてくる町でもあります。

ここではアートの世界的なイベントが行われていて、私も呼ばれたことがあります。2004年にはバルセロナ市が世界に呼び掛けて、Universal Forum of Culturesを開催しました。最近では世界経済フォーラムや世界社会フォーラムといったフォーラムが世界各地で行われていますが、ダボス会議は世界中のお金持ちや威張っている国のリーダーが集まって勉強会をする世界経済フォーラムです。それに対して、グローバル化の中で割を食っている国の人たちが集まって、経済だけではまずいから、社会のことを考えようということで始まったのが世界社会フォーラムです。バルセロナが始めたのは世界文化フォーラムで、これは文化の力で格差拡大やキリスト教世界とイスラム世界の憎しみ合いを何とかやめようという目的を持って開催されました。このときにも、文化芸術が大きな切り口になって、世界の平和や環境というテーマを考えようということになりました。

このような流れの中で、「創造都市」というものがバルセロナから発信されました。ちょうどこの時代には、ニューヨークやロンドン、東京で「世界都市」「グローバル都市」という言葉がはやりました。大阪も世界都市になりたいということで、ワールドトレードセンタービルやオリンピックの誘致をしましたが、大阪の場合は全部失敗して、その負債に今もなお苦しんでいます。

世界では、世界都市から創造都市へ、都市を見るときの考え方が転換してきています。そのときの大きなポイントとして、20世紀はものづくり、製造業の経済活動が中心でしたが、21世紀は情報と知識が経済を動かしています。この知識・情報経済はネットワーク社会ということで、大変大きな変化を起こしています。例えば最近、エジプトやチュニジア、リビアなど、長らく独裁政治をとっていた国々で若い人たちのエネルギーが爆発していますが、そのほとんど

のきっかけになったのはソーシャルメディアだといわれています。今、場合によるとネット革命と言ってもいいようなことが世界中で起きていますが、これが一つの社会のトレンドの変化になります。このように大きな経済活動の変化が起きているときに、創造的な人たちが集まらない地域や都市は衰退へ向かうことになります。

2．アートで再生したイギリス

私の友人にイギリス人のチャールズ・ランドリーという人がいます。私より一つ年上で『The Creative City』という本を書いた人ですが、この本はちょうど2000年に出して、21世紀の都市論として大変注目されました。大阪にも４～５回呼んでいて、關市長のときには直接ランドリーを紹介し、大阪市で創造都市を政策的に推進するようにしていただいたのですが、イギリスではブレア首相の約10年間にこのランドリーの考え方を体系的に採用し、国策として創造都市と創造産業を進めました。

Creative Industryとは、芸術文化を活用した新しい13業種の産業群を都市型産業として育成するというものです。このときの一番大きな考え方の変化は、これまでは、例えば自動車産業やハイテク産業は自動車やハイテク家電を造るというように、製品によって産業群を分けてきましたが、創造産業は個人の創造性や才能を源泉にしていますので、言い換えると知財ビジネスと言ってもいいかもしれません。コンピューターが発展しますと、絵画や音楽など古い芸術の形態でも、その楽しみ方や配信の方法が全く変わります。今はどんどん新しいメディアが出てきて、古いタイプの芸術のイメージが変わってきています。そうすると、そこに雇用が生まれて、関連して産業が伸びる状態が出てきています。

そのような流れを非常にうまくつかんだのがロンドンでした。次のオリンピックはロンドンで開催されますが、開催国を決める決戦で、パリとロンドンが戦いました。大体みんなパリが勝つだろうと思っていたのですが、ブレアが出てきて演説をしたからロンドンが勝ったらしいと言われています。でも、どうもそれだけではなく、パリとロンドンを普通に比べると、パリの方が文化都市で、ロンドンは金融だけで飯を食っているつまらない都市だと思っていたのに、実は世の中が反対になっていて、ロンドンの方が面白いということが次々

に起こっていました。

例えば、ロンドンの町の中心部、テムズ川の南側の河岸に、汚い火力発電所の建物がありました。この火力発電所は壊すのも大変なので放ってあって、どう使ったらいいかとみんなが頭を悩ませていたのですが、イギリスで一番有名な美術館である国立のテート・ギャラリーが、どんどん収蔵作品が集まって現代作品はもう展示できない、どこかに展示スペースが欲しいということで、その火力発電所をそっくり美術館に変えたのです。私が行ったときには、まだ1階スペースに大きなタービンが残っていました。そういう場所に現代アートが飾られていくということで、とんでもなく変な場所です。そのとんでもなく変だということが、かえって古いものと新しいものが出会って、一種の近代産業遺産で楽しむということで、テート・モダンという今一番面白いアートスポットになっています。普通の美術館はイギリスでも大体夕方に閉まってしまいますが、テート・モダンは週末になると夜中まで開いています。また、イギリスの場合、美術館はただですから、家族連れが1日ゆっくり楽しめるようになっています。

このような芸術系のものが産業として発展していきますと、それまで大学を出てぶらぶらしていた若いアーティストのような人たちが、だんだん仕事に就くようになります。この事業を全体としてCreative Londonとして体系化していき、音楽やデザインの分野で若いデザイナーを応援し、一方ではパブリックアートで都市の公園や駅などを変えていきました。

また、Creative Partnershipsという形で教育改革も行っています。日本の場合はゆとり教育が大失敗だといわれていて、大学でもゆとり教育を受けた学生たちが来ると、全然英語も読めないし、高校の授業を大学でしなければいけないぐらいにみんな思っているのですが、イギリスではCreative Partnershipsという教育改革が大成功したといわれています。この違いは何かと考えてみますと、簡単なことでした。

日本でもイギリスでも、小中学校で子供たちの集中力がなくなり、授業中に教室を歩き回ったり、授業に集中できないという現象が起こっていました。そのときに、日本はゆとり教育としてゆとりの時間を作りましたが、その時間をどう使うかは現場の先生任せだったと思います。イギリスの場合はそうではなく、現場にアートマネージャーを派遣して、子供たちが関心を持つようなアー

トプロジェクトを、若いアーティストと一緒になってやっていきました。これをクリエイティブ教育といいます。アートマネージャーは、自分はアーティストではないのですが、面白そうな若いアーティストを呼んできて、子供たちと一緒に作品を作ったりして楽しむわけです。そうすると、結果的に子供たちも元気を取り戻すので、普通の授業に対する集中力が上がって、全体として教育水準が回復してきました。芸術は、うまく使うと子供たちの創造力を引き出し、授業も改善することができるのです。

それだけではありません。ロンドンのナショナルギャラリーという老舗の美術館のすぐ近くに、やはり古くからの大きな教会があります。世界の大都市には大概、町の中にホームレスの人たちがたくさんいますが、その人たちのシェルターは教会が担当しています。日本でいうと寺院です。その教会がいろいろな社会復帰のプログラムを持っているのですが、何とオペラを使ってホームレスの人たちの社会復帰をしているストリートワイズ・オペラ（大道芸のオペラ）という団体があります。そのリーダーは、ロイヤル・オペラ・ハウスという最高級のオペラシアターの前でごろごろ寝転がって、お客さんたちに足げにされているようなホームレスの人たちに何とかオペラをやらせてみようと思い立ち、オペラのレッスンをシェルターで始めました。そして、その人たちのオペラ作品が、最高級のロイヤル・オペラ・ハウスで演じられるまでにレベルが上がったという話があります。今でも年に数回公演しているのですが、私はぜひ日本でも１回やってみたいと考えて、一昨年いろいろな外国の財団と協力して、横浜と大阪に呼びました。大阪では西成の失業者や高齢者の人たちと一緒にワークショップを行っています。

このように、芸術というものは産業にもなりますし、元気を失っている失業者やホームレス、あるいは集中力を切らせた小中学生でも、芸術をうまく使えば再生していくエネルギーが出てくるような力を持っているわけです。

３．発展する都市の条件

イギリスでこのように都市再生やまちづくりに文化が使えそうだと言われていたときに、アメリカではリチャード・フロリダという人物が出てきます。彼の説は非常に変わっていて、同性愛者が多い町ほどクリエイティブになるというものでした。

1900年から2000年直前までの100年間、アメリカ社会における職業階層の変遷を見ると、農業就業人口は右肩下がりになっています。そして、製造業の就業人口は緩やかに右肩上がりになっています。また、サービス業の就業人口は2000年に近付くにつれて伸びてきて、製造業とサービス業の就業人口は1960年にクロスしています。アメリカではサービス経済化、第１次の情報化社会が1965年から始まったといわれています。日本ではもう少し後になりますが、サービス経済化の中身を詳しく見ると、今、急速に増えているのが創造階級（creative class）の人たちです。

フロリダ氏によりますと、今、創造階級といわれる人々がアメリカ社会の中に約３割存在します。農業・製造業はもう頭打ちですので、農業や製造業が主体の地域は当然衰退地域になります。一方、クリエイティブな仕事をしている人たちは今後ますます増えるのですから、その仕事をしている人たちが集まってくる地域が発展することになります。どのような業種かというと、まず超創造的中核と言われるのがコンピューター、数学、建築、エンジニア、生命自然科学、社会科学、教育、図書館、芸術、デザイン、エンターテインメント、スポーツ、メディア関係です。それを支えるものとして、マネジメントや法律、医師、セールスマネジメントなどが挙げられています。アメリカ社会の中では今、この二つが社会の中でも３割を超えて、ますます発展しているのです。

そうなると、この最もクリエイティブな人たち、例えばコンピューターサイエンスの仕事をする人と、エンターテインメントや芸術、デザイン関係の仕事をする人たちは、一体どの町を選んで住むのか、あるいはどんなライフスタイルを好むのかと調べていくと、共通の特徴がありました。そこから、どうもゲイが多いところに集まっているようだというとんでもない結論が出てきたのです。

当然、当時のブッシュ大統領は同性愛や同性愛者同士の結婚などとんでもないというキリスト教の原理主義者でしたので、フロリダの説はブッシュ大統領と真っ向から対立するようなとても面白い説でした。一方、オバマ大統領を支持する層はどうかというと、ある意味ではこれまで社会の中で虐げられてきた黒人の人たちで、ゲイやレズビアンも既成の社会通念からいえば社会から排除された人たちです。こうした人たちが社会の中に出てくるという大きな転機がありました。

実はアメリカの都市の中でもゲイやレズビアンが最も自由に物が言えるのはサンフランシスコです。ですから、サンフランシスコは最も創造的だということです。あるいは、オースチンという町もとてもいい。サンフランシスコから湾を下っていきますと、シリコンバレーです。シリコンバレーはまさにハイテク産業のメッカで、サンフランシスコはゲイ・レズビアンやアーティストなど、自由な人たちが多い。このようなところで、アメリカでは新しい地域のムーブメントが起きてきています。そうなると、相変わらず古い産業にしがみついているピッツバーグのような町は駄目で、自由に物が言える、新しいタイプのライフスタイルを選ぶ人たちがどんどん集まってくる町こそいいと言われるようになってきました。

このフロリダの説は世界中で大変なブームを呼んで、シンガポールでは有名なゲイのパレードが行われました。シンガポールは警察国家で、道路にごみを落としても罰金を取られるような国なので、当然、当局がゲイのパレードなど認めるはずがありません。しかし、世界の流れは今、ゲイやレズビアンが自由に物を言えて、面白い人たちが集まってくるところでないとハイテク産業も伸びないということで、シンガポールが置いてきぼりになってはいけないので、頑張ってゲイを集めてパレードをしたわけです。それほどに世界中で大きなアイデアの転換が起きてきました。

4．創造都市・ボローニャ

ユネスコという国連機関があります。時々ユネスコとユニセフを勘違いする人がいますが、ユニセフは募金の方で、ユネスコは教育と科学と文化を扱う国連の機関です。このユネスコが創造都市ネットワークを推進するという提唱を行い、今、世界で27の都市がユネスコの創造都市として認可されています。片方で、ユネスコは世界にある有形・無形の文化遺産を世界遺産としてその保護を呼び掛けています。つい最近、堺市にユネスコのアジア太平洋無形文化遺産研究センターが開設されましたが、大阪も文楽が世界遺産になっています。このように古い文化芸術、遺産として登録されているものは、世界中で100を超えていますが、それだけではなく、新しい文化産業を発展させている都市を応援していこうという流れができていて、日本では神戸、名古屋、金沢が創造都市になっています。大阪も關市長のときにユネスコに登録しようと少し働き掛

けたのですが、今はペンディングになっています。せっかくならもう少し早くやればよかったと私は思っていますが、世界でたくさんの都市がこの流れに乗って、例えば大阪の姉妹都市である上海や、韓国のソウル、モントリオール、サンタフェ、ベルリンも創造都市のネットワークに入っています。

私が一番好きなイタリアのボローニャという町も、やはり創造都市になっています。ここの人口は37～38万人で、大阪府下の衛星都市の人口とそれほど変わりないのですが、影響力のある都市で、周辺を合わせると90万ぐらいになります。この都市がなぜ創造都市なのか、世界的に注目されるのかということで、幾つかポイントだけお話をすると、まず経済のシステムが変わっています。大企業はあまりなく、ほとんどが中小企業（piccole e medie imprese）で、特に職人企業（artigianato）という独特の形態があります。これは、経営者本人も一緒に働いていて、20人ぐらいまでの規模の会社ですが、これが町の主役で、ボローニャの商工会議所の会頭も職人企業の組合から出ています。

ここには、ジュエリーを作ったり、バイオリンを作ったり、小さなリトグラフを作るなど、伝統的な職人が町の中に今でもたくさん住んでいます。それから、町のちょっと外れまで行きますと、オートバイを造っているドゥカティ（Ducati）があります。マニアはやはりヤマハやホンダではなく、ドゥカティの赤に乗らないといけないということで、オートバイレースのレーサーはほとんどドゥカティに乗っているぐらい、特別なオートバイです。また、フェラーリの工場もボローニャと隣町のモデナの間にあります。イタリアではフェラーリというと世界最高級車ですが、要はこの町では高級車を少しだけ造る、日本は中級車以下を大量に造るということです。どちらがいいかというと、確かに庶民的にはそんな高級車は要らないので日本の方がマスマーケットでは強いのですが、イタリアはマスマーケットはあきらめて、高級車を少しだけ造って回っていく経済になっているのです。そうなると、部品の点数は少ないですから、職人が手仕事的に作っています。そうなると、職人の技能が生きる分野で、伝統的なジュエリーやファッション、革靴も残るし、最先端の高級品の市場でも職人の仕事が残るということで、これがイタリア型の戦略です。そうすると、企業の規模はどちらも小さくて済むのです。

4-1. OperaとLavoro

イタリアにはあまのじゃくの人も多いので、大企業へ行ってもクリエイティブな仕事はできやしない、本当にクリエイティブな仕事をしようと思うと、中小企業で自分の好きなようにやった方がいいという考え方をとります。このときの仕事を、イタリア語ではoperaといいます。日本語でも「労働」と「仕事」という二つの言葉があり、英語でもworkとlaborという二つの言葉があるように、イタリア語なりラテン語ではoperaとlavoroという二つの言葉があります。もう一方のlavoroとは奴隷の仕事です。よく労働者は賃金奴隷だと言われていますが、これは経営者や上司に言われたら盾突くわけにはいかない、結局、言われたとおりに仕事をしなければいけないからです。その代わり、ちゃんと給料を払ってもらえればいいということで、その時間は売るわけです。家に帰ってやっとほっとするのですが、イタリアでは、仕事場でも自由にやりたい人たちが中小企業に行って、operaをしています。

operaという言葉は、実は一人前の人間が自由に創造的に作品を作ることを意味しています。オペラハウスで演じられる音楽のオペラも全く語源は同じで、非常に広い意味があるのですが、このオペラを仲間と一緒にやるのが「コ・オペラ」です。生活協同組合のコープはこのコ・オペラを縮めたもので、日本語で協同組合と訳しますが、仲間と一緒に仕事をするという意味になります。最近は、住民協働といったときに「コラボレーション」という言葉を使います。あれは全然新しい言葉ではなく、一緒にlavoroするということです。この場合は奴隷の仕事で汗をかくことになるので、私はコラボレーションという言葉はあまり好きではありません。やはりコ・オペレーションの方が面白いと思います。

ともかく、何が言いたいかというと、operaの中には自由に創造的に作品を作るという意味があって、それが町の中で生きている、現にものづくりの現場でもoperaが行われているということです。小さいだけにネットワークを組まないと競争できないので、ネットワークを組んで仕事をしていることが特徴です。

4-2. 社会的協同組合設立の動き

このoperaを今度は社会の中で一緒にやろうというシステムが出てきます。

コ・オペラ、cooperativaがイタリア語の協同組合になります。普通は生活協同組合でも農業協同組合でも組合員になればメリットが発生しますが、ならなければメリットはありません。イタリアで今新しく出てきている社会的協同組合（cooperativa sociale）は、組合員以外の人の健康や福祉、あるいは人間としての再生の仕事をしましょうというものです。これは全く新しいタイプの協同組合で、日本では今、民間企業だけれども社会的目的で仕事をしましょうという社会的企業という考え方がありますが、これに近いかもしれません。

ボローニャには今たくさんの社会的協同組合があります。法律ができる前から実態として始まったのが、保育所や老人ホームを協同組合で運営するカディアイ（Cadiai）です。これは当時のウーマンリブ、最近ではジェンダーや男女共同参画と言われますが、そういう考え方を持った女性たちが作った協同組合で、みんなが働きに出るために共同で保育所を運営し、老人を介護するというところから始まりました。現在はたくさんの保育所や老人ホーム、社会センターなどを協同組合で運営しています。

それから、障がい者の働く権利を保障しようという目的でも、やはり社会的協同組合が活動しています。特に農作業などを通じて障害の回復を図る試みがあって、４年ほど前に日本にもリーダーをお呼びしました。

また、ピアッツァ・グランデという名前のホームレスの組合もあります。ホームレス自身が社会的協同組合を作り、まず経済的自立を図るために、町の中に捨てられた自転車や電気冷蔵庫、テレビなどを集めてきて、再生して販売しています。また、古くなった服なども再生していて、同時に劇団を作っています。先ほどロンドンではホームレスの人たちがオペラをやって元気になろうという話をしましたが、イタリアの場合はコンメディア・デッラルテ（Commedia dell'Arte）という仮面即興劇があります。有名なベネチアのカーニバルで付ける仮面も全部、主要な役割が決まっているのですが、その仮面を付けて即興劇、喜劇をする劇団を作りました。３月20日に大阪市立大学杉本キャンパスで西成の失業者の人たちと一緒にやりますので、関心のある方はぜひ来ていただきたいのですが、ホームレスが自立をするために芸術を一緒にやろうという試みが出てきています。

このようなボローニャの話を調べて本を書いたところ、昨年亡くなった井上ひさしさんがぜひボローニャへ行って調べたいと言われて、その後に『ボロー

ニャ紀行』という本を出されています。これは文庫本なので安い上、私の本より読みやすいので、まだ読まれていない方はぜひ読んでください。井上さんとは大阪でもシンポジウムをし、障がい者の協同組合の人たちも一緒に呼んで、日本全国あちこちで公演をしてもらいました。

4-3. 大学の起源

このように町の中で出てきているいろいろな取り組みを調べていくと、すべて自分たちの手で何とか町をつくる、行政ももちろん頑張るのですが、そのときにオペラをしながら、楽しみながらつくっていることが特徴であることが分かります。町のそのような自立心がどこから出てきているのかということで、ずっと調べていきますと、実はヨーロッパで一番古い大学がボローニャの町にありました。今から約900年前に、ボローニャの町の中にUniversita di Bolognaという名前の学生たちが作った協同組合、当時はギルドのようなものがありました。これが後にヨーロッパ中に広がって、パリ大学になったり、ロンドンのオックスフォード大学になったりしています。英語ではuniversityといいますが、その語源はボローニャで始まった学生の作った協同組合なのです。

ボローニャでは学長をレクトルといいますが、これは学生のリーダーです。当時は勉強したいと思っている人たちが集まって優秀な教師を呼び、契約を取り交わして始めた一種の塾のようなものだったのですが、それが広まっていきました。契約ですので、当然、無断で休講したり、授業が下手で学生の集まらない教師は首になってしまいます。今はそういう教師が勉強したくない学生にとってはとてもいいわけですが、本当に勉強したいと思っている人にしてみればやはりとんでもない、授業料など払えないということで、大学も実は協同組合的原理で生まれたのです。

町の中で必要なものはみんなの力で作る。それも、協同組合はコ・オペラですから、operaを一緒にやるということです。芸術は何となく日常生活と離れたところにあると思わないでください。職人の仕事も音楽のオペラもまさに同じ語源なのです。それを楽しくやるようなシステムができるかということです。まちづくりも同じで、私は一種のoperaだと思うのですが、そういう試みが出てきました。ちなみに、ボローニャはユネスコの音楽都市としても登録されています。

5．日本における創造都市

このような形で、ヨーロッパを中心に創造都市のネットワークをユネスコが作ってきましたので、私は本を書いて日本でもその考え方を広めたいと思いました。そして、青木保さんが文化庁長官のときに応援してくれて、文化庁で「文化芸術創造都市」として表彰を始めてくれました。これは2007年から始まって、横浜や金沢など割と有名なところもあれば、小さめの都市も表彰されています。今年の分は今日発表になっていて、神戸市、水戸市、小さい町では長野の木曽町、越後妻有のアートイベントで有名な津南町と十日町、富山県の南砺市の五つを選んでいます。

5-1．金沢の取り組み

日本ではどんな取り組みをしているかということで、まず金沢の取り組みをご紹介します。私は以前、金沢大学で金沢のまちづくりについて市民や当時の市長たちともいろいろと意見交換をしていました。私のアイデアは、日本のボローニャが金沢だというものです。伝統工芸があり、現代的な産業もあり、大企業はあまりないけれど、創造的な仕事が行えるという町がいいのではないかということで、金沢の人たちと意見交換をしながらいろいろな実験しました。幸い人口は今45万ぐらいなので、社会実験をするにはちょうどいいサイズだと思います。やはり東京や大阪は少し大きすぎて、衛星都市の規模が社会実験をするにはとてもいいと思います。

いろいろな実験をしましたが、最初に私が直面したのは、バブルのころに町のきれいなところにどんどん高層マンションが建ってしまうということでした。それを何とか抑えたいと思っていたら、町の人たちもみんな同じような思いを持っていました。自分たちの普段見慣れた景色が、マンションができたことによって見えなくなってしまう、おかしいということで、今でこそ「文化的景観」という言葉が行政の中にも入ってきましたが、この言葉を最初に使ったのは金沢の市民だと思います。今から20年ぐらい前、バブルの時代に、浅野川という泉鏡花などが住んでいた界隈にマンションが建つというときに反対運動をしました。金沢には結構文化人が多いので、政治的な反対運動をやるのではなく、文化運動をやろうということで「老舗・文学・ロマンの町を考える会」を作り、浅野川に浮き舞台を浮かべてパフォーマンスをするなどして反対運動

を広げ、結果的には景観条例を新しく強化することになっています。

もともと日本では1966年に古都保存法という法律ができるのですが、日本の各地の城下町は大体500年ぐらいの歴史しかないので、古都保存法の対象にはなりません。金沢もそうだったので、1968年に独自条例を作りました。しかし、それでも不十分だということで、1989年には景観条例を作っています。この中で非常にたくさんのきめ細かい条例を作ったのが金沢市の特徴で、「こまちなみ保存条例」「用水保全条例」「斜面緑地保全条例」という変わった条例まであります。河岸段丘があるので、川沿いのところを全部保全していったわけです。調べていくと、金沢市は独自条例の数が日本で一番多いと思います。当時の市長は、町の個性は全国画一の法律では絶対に守れない、同時に、規制緩和の時代ですので、これまでの条例や行政指導で勝手なことは許さないという流れはおかしいということで、町を個性的に美しくするためには独自条例で縛るしかないと、たくさんの条例を作りました。これは今でも財産として残っていると思います。

それから、グローバル・ニッチ・トップという言葉がありますが、金沢には結構面白い、特定の分野でトップシェアを持つような企業があります。これは、決して大企業ではありません。金沢で意外と知られていないニッチトップは回転ずしコンベアのシステムです。これを作っている会社は世界に２社しかないのですが、それが金沢とその隣の町にあるのです。今はロンドンやパリなど、世界中に回転ずしのお店があります。すしは今や日本を代表する食べ物になりましたが、これはやはりすし職人だけではここまではやらなかったと思います。同時にコンベアシステムがあって、回転ずしとセットになって出ていったのです。このあたりが面白いのですが、すし職人の技とシステムを組み合わせて、これは大手がやってももうけは薄いので、町工場がやっています。

それから、伝統工芸の分野では、女性社長の箔一という会社があります。金沢箔という伝統工芸があって、例えば金閣寺の金箔は金沢から持っていっています。金沢で国内の99.9％まで作っているのですが、これまでは大体それを仏壇に張っていたのです。それが今、金箔工芸という形で新しく展開しています。

ここで意外と面白いのがあぶらとり紙です。女性はお化粧のときにあぶらとり紙を使います。これが金箔と関係しているというと、みんなびっくりします。ブランドとしては京都の「よーじや」から出しているので、金沢の金箔屋とは

関係ないと思っているかもしれませんが、金箔は金の延べ棒をたたいていってどんどん薄くしていきます。その薄く延ばしていく工程で、金を挟む箔打紙という紙がとても大事なのです。その紙はもともと特別の和紙で、柿渋で何回も強くした耐久性のあるものを使っていました。この箔打紙の使い古しになったものを、金沢のことですから、金箔屋さんの周りに芸者さんの置き屋があって、その芸者さんたちがもらっていってお化粧を落とすのに使っていたのです。女性の経営者ですから、これはきっと商売になるということで、この箔打紙をあぶらとり紙として京都の「よーじや」から出したところ、爆発的に売れました。今は男性用まであります。そして、金箔を使った化粧品など、どんどんすそ野が広がっていきました。

そのような形で、伝統工芸が次々近代的なアイデアで変わっていくのも金沢型だと思います。面白い小さな企業がたくさん出てきていて、これが行政の進めている文化政策とうまくマッチしてきたのだと思います。

去年の暮れに金沢の市長選挙があり、大方の予想に反して20年の実績を持つ山出さんが若い山野さんと交代することになりました。山出前市長が退任のときに、「自分にはとても印象に残っている事業が二つある。一つが市民芸術村、もう一つが21世紀美術館だ」と言われました。私自身も、ちょっと違うアイデアではありましたが、この二つの事業に提言したことがあって、非常に感慨深いものがありました。

金沢市民芸術村といわれている施設は、今日ずっとお話ししているような、使い古し、使い回しの施設です。金沢は繊維産業の町だったので、紡績工場がたくさんありました。その紡績工場の中で、大和紡績という大変由緒のある紡績工場が使われなくなったので、市が買い取って、工場は壊したのですが倉庫群を残して、それを市民芸術村という形で、市民の中で芸術を愛好する人たちが使える施設に変えたのです。

そのときにいろいろ討論が起きて、日本で初めての使い方が実現しています。つまり、１日24時間眠らない施設にしたのです。なぜ眠らない文化施設が生まれたかというと、皆さん方の周りにもいろいろな施設があると思いますが、大概、管理上の理由から夜９時とか10時で閉館になります。普通の文化施設は例えば東京や外国の文化作品を見るだけの鑑賞型ですからそれでいいと思うのですが、市民が主体になって芝居をつくる、音楽をつくる、新しいアート作品を

つくるという場合、つまり創造型の文化施設の場合は、９時や10時で終わっては困るのです。なぜ困るか。皆さん方も仕事が重なってきて、若いときなら徹夜してでも仕事をするということが時々あると思います。あるいは徹夜して勉強したという記憶があるかもしれません。どんな凡人でも夜中になると頭がさえるのです。動物は夜中こそ精神活動のピークを迎えますので、夜中に使えない文化創造型施設は駄目なのです。夜中こそ新しいアイデアがわいてきて、凡人は朝になったら忘れてしまうのですが、本当の天才はそのときのことをちゃんと残していきます。ですから、創造型の文化施設は１日24時間自由に使えてこそ初めて意味があるといって、市民の代表が市長と掛け合いました。その結果、市長からは火事だけ出さないようにしてくれればいいということで、条例まで作って、市民が自主的な管理で責任を持って使うという日本で最初の新しいタイプの文化施設が紡績工場の倉庫群から生まれました。

これはとても印象深いことで、何か新しい建物を造るというよりは、伝統的な建物、近代産業遺産のようなものを創造型文化施設に変えていくという流れが、この後から日本で一斉に出てきました。しかし、なかなか24時間自由に使えるというものはできていません。大阪ではホームレスが来てしまうなど、いろいろ問題があるようです。

次に、2004年に21世紀美術館を、こちらは新築で造りました。この21世紀美術館は奇跡の美術館と呼ばれています。何が奇跡だったかというと、21世紀という名前の意味は現代アートだということです。例えば大阪でも現代アートの美術館はあります。中之島の国立国際美術館です。これも100％現代美術館でもないのですが、1980年代以降の作品しか置かないという考え方では、金沢の21世紀美術館の方が徹底しています。普通はそういう美術館は小難しくて頭がくらくらしてしまうなどと言われています。むしろ世界の名作といわれているものをゆっくり鑑賞する方がいいという人たちが多いので、普通は美術館というと教養型で、あまり子供が走り回っていてはいけないものだとされているので、みんな息を凝らして作品を見ています。しかし、この美術館は全くそういうものから解放されていて、子どもが走ろうが何をしようが自由です。

21世紀美術館は開館の年に158万人を集めました。市民の人口は45万人ですから、その３倍です。現代美術館でそれだけの観客が集まるということは、当時の日本ではありませんでした。実は秘密がありまして、上から見ると建物が

ばらばらとあるのですが、大きく二つの目的の建物群があります。現代アートを鑑賞する場所と、市民が参画して交流できる場所があって、この二つのものを一つのガラスで取り囲まれた円形のものにまとめたところにこの美術館のミソがあるのです。現代アートだけでは決して人が集まらないから、市民芸術村の持つ機能を持ってきたらどうかということで、マスタープランのところから話し合って、週末は夜10時まで開いているスペースを作ったところ、公園のような外観も含めて、美術館に何となく吸い込まれていくように市民が集まってきて、いろいろな会話が起きてきました。このような新しいタイプの美術館で、翌年以降も入場者の数は減らず、ますます伸びています。また、この建物を設計した妹島和世さんは、昨年、建築のノーベル賞といわれているプリツカー賞を取られました。

金沢市は今、ユネスコのクラフト分野の創造都市として認定されています。昨日も実は金沢で新しい市長さんと話をしてきましたが、ぜひ力を入れてやりたいと言っておられました。ここでは今、「クラフトイズム」という変な英語を提唱しています。これはどういうことかというと、20世紀は大量生産・大量消費の世紀で、それを始めた最初の企業はアメリカのフォード自動車会社ですので、その名前を取って「フォーディズム（Fordism）」という英語があります。これは大量生産・大量消費という社会システムのことを指していて、フォーディズム都市というと、大企業の大量生産型の工場が中心にある都市です。どこの都市とは言いませんが、多分、大阪府下にもあります。これからはクラフトイズム、手仕事であったり、アニメーションであったり、コンピューターゲームの開発でもいいし、先ほどの回転ずしのコンベアでもいい、とにかく小さな企業でやっている職人的なものづくりや職人的な芸術、金沢の場合は伝統工芸や和菓子、料理も含めて、全部それを手仕事と呼び、それを大事にしている町として、21世紀は大量生産・大量消費のフォーディズムではなく、クラフトイズムではないかというメッセージを出しているのです。

5-2. 横浜と神戸の新しい動き

このような金沢の創造都市の流れを受けて、早速、横浜がもっとスピーディー、ダイナミックに「クリエイティブシティ・ヨコハマ」を始めました。このとき、今は辞めてしまいましたが、中田さんという市長が出てきてトップ

ダウンで創造都市事業本部を作り、金沢市より先に創造都市推進課を置きました。そして、先ほどのフロリダの説を都市政策の中に入れて、アーティストやクリエイターが集まる都市、すべての市民はアーティストであるという呼び掛けをして事業を推進してきました。

ただ、このときも古い建物をうまく使うという使い回しをしています。「BankART1929」ということで、これも変な和製英語ですが、銀行でアートをするというものです。横浜は150年の歴史しかない割には都市デザインに力を入れてきていて、古い建物を保存しています。たまたま1929年という世界大恐慌の年に横浜にできた二つの銀行、旧第一銀行横浜支店と旧富士銀行馬車道支店を残していたので、これをアートセンターに変えたのです。旧第一銀行横浜支店は現在、ヨコハマ創造都市センターとなっています。一方の旧富士銀行馬車道支店は、東京芸大が映像の大学院として使っています。

その後を追い掛けて、今度は神戸がユネスコのクリエイティブシティの中でもデザイン分野ということで、「デザイン都市・神戸」という形で展開を始めています。神戸の場合は1995年の阪神大震災から約10年かかって復興を遂げ、次の都市のビジョンをどうするかというときに、経済界がデザイン都市を提唱してきました。大阪にあるフェリシモという通販の会社がユネスコの教育事業をお手伝いしていたので、ユネスコの創造都市として手を挙げたらどうかという誘いがあり、商工会議所でビジョンを作って、行政に提案しました。実は金沢のケースでも経済同友会がまとめて市長に提言したという形があったので、やはり創造都市という事業は、経済界や市民などからビジョンが出てこないと、行政だけでは簡単に進まないのではないかと思っています。

神戸の場合は、デザインというものを単にデザイナーの仕事やファッションだけに限定せず、衣・食・住・遊・生活すべてにデザインがあるという考え方で、町のデザイン、ものづくりのデザイン、暮らしのデザインという総合的な計画にしていくことにしました。そして、ユネスコに申請して認可され、ユネスコの創造都市のデザイン部門の都市として、今、事業展開を始めています。そのシンボル事業として、金沢の場合は紡績工場の倉庫、横浜の場合は銀行だったのですが、神戸は今、生糸検査所を考えています。横浜も神戸も明治維新のころの開港都市です。戦前の日本の中心的な輸出産業は生糸や絹製品ですから、生糸の検査をする国立の大きな施設がありました。それが今はもう使われなく

なって、国から安く払い下げられたので、とても大きな建物なのですが、そこをデザイン・クリエイティブセンターKOBEの拠点に使おうと、改装が始まっています。その改装工事が始まる直前に、去年の春から夏にかけて、いろいろな現代アートの取り組みが行われていて、さまざまな面白い、これが古い施設かと思うぐらいの扱い方をしていました。

このように、歴史も大事にしながら、その歴史に新しいアートやアイデアを加えて、それを市民が楽しむ、あるいは市民がむしろアート活動に参画していくという流れがあると思います。京都、大阪の話もあるのですが、今日はもう時間がないので、省略させていただきます。

6．芸術文化で都市の再生を

創造都市をつくるポイントとして、その都市に住む市民（個人）と、市役所や企業を含めた団体・組織や都市全体のそれぞれのレベルを考えたときに、その町に定住している企業や市民とアーティストやクリエイターを結び付けていく役割を持つコーディネーター、プロデューサーが絶対に必要です。そこでアーティストやクリエイターだけが頑張っていくだけではまずいので、市民がさまざまなところで持っている信頼に基づく人間関係（ソーシャルキャピタル）を全体としても強めていくということで、ボローニャなどのように、実にさまざまなところで社会的な協同組合が活躍しています。

もう一つのキーワードは、イノベーションとインプロビゼーションです。イノベーションとは、今オープンイノベーションという言葉がよく使われますが、これまでの技術の発展と新しいものとが急速に結び付くことによって起きる、主に技術系の話です。それに対して、芸術の分野で即興的に新しいアイデアが生まれてくることをインプロビゼーションといいます。ジャズの即興演奏が一番有名ですが、譜面のない即興部分をどう演奏者がうまく演奏できるかということが本当のジャズの楽しみです。同じように、サッカーでもインプロビゼーションが起きますし、イタリアの仮面劇でもインプロビゼーションが起きます。つまり、その場その場で臨機応変に新しいアイデアとアイデアがぶつかって、これまで体験したことがないような全く異次元の考え方や作品が生まれるということです。

意外にそういうものは全く近代的な、大阪でいうと北ヤードのようなところ

では生まれません。そうではなく、むしろフェスティバルゲートのような古い汚いところや工場跡、近代産業遺産、京都でいうと町屋などで起きてくるのです。ですから、伝統的な街並みを保存し、歴史文化を大事にしている町が、かえって創造都市になることがあるのです。これが創造都市を市民的に考えるときには大事なことではないかと思います。

今は特に大きな時代の転換点で、財政的にも余裕がないので、従来型の大型ハード事業で開発をするといった発想からはもう決別せざるを得ません。そのときに、コンパクトシティもそうでしょうし、実は文化資源は掘り起こせば無尽蔵ですので、芸術文化を社会の資源、インフラであると考えて、都市の再生を目指してはどうかというメッセージをお伝えして、私の話を終わります。ご清聴どうもありがとうございました。